

氏 名	井村 弥生 (いむら やよい)
学 位 の 種 類	博士(看護学)
学 位 授 与 番 号	甲博看第 2 号
学位授与年月日	令和 4 年 3 月 2 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 名	与薬における看護師のリスクテイキング行動の自己評価質問紙の開発 (Development of a Self-Assessment Questionnaire for Nurses' Risk-Taking Behavior in Medication)
論 文 審 査 委 員	(主) 教授 田中 克子 教授 赤澤 千春 教授 土手 友太郎

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

<<緒言>>

医療は安全を優先事項として対策を行っているが、医療事故は今なお発生しており、その要因は様々で、かつ複雑化した重大な事故が発生している。その状況に携わる看護師には、常にリスクを認識し対応することが要求されるが、その行動には個人差があり、リスクを慣行する行為、つまりリスクテイキング行動が見受けられる。

リスクテイキング行動 (Risk-Taking Behavior : RTB) とは、対象の危険や損傷の可能性を認識しながら行われる行動である。対象の危険や損傷の可能性を明白に認識していない場合や、「たぶん大丈夫だろう」といった不確実さを伴う場合の意識的・無意識的な行動が個人行動の中に認め、曖昧な行動が医療事故発生の一要因と考えられる。

RTB の研究は、主に交通心理学や行動科学、認知心理学等で発達し、個人の傾向性、場面一貫性等の特徴がある。看護領域における RTB の研究では、時間的要因や社会的圧力などが加わることで発生しやすいと示唆されているが、未だ具体的な対策を考案した研究はなく、個人の傾向を判定するツールなどは見られていない。そこで、本研究では、看護師個人が自己の RTB の傾向性を知ることができる自己評価質問紙の開発を行い、それにより事故防止への自己認識を高めるための施策になると考えた。

<<目的>>

本研究の目的は、与薬における看護師の RTB の自己評価質問紙の開発であり、開発過程は 2 段階で行った。

第一研究：与薬における看護師の RTB の傾向を自己評価するための質問紙の原案を、先行研究および、医療事故報告内容から作成することを目的とした。

第二研究：与薬における看護師の RTB の自己評価質問紙の開発を目指し、全国の看護師を対象に質問紙調査を行った。得られたデータを探索的因子分析と確認的因子分析による質問項目の妥当性検証と信頼性検証をおこない、その後、質問紙の評価値の基準の示唆を得ることを目的とした。

<<方法・結果>>

第一研究では、看護師の与薬における RTB の自己評価尺度の開発を目指し、質問紙の原案を 2 ステップで進めた。

ステップ 1 では、先行研究の文献検討及び日本医療機能評価機構の医療事故報告内容から看護師の RTB についての質問を作成した。文献検討では、【属性】、【状況要因】、【性格要因】、【認識要因】、【行動技能要因】の 5 カテゴリーと、16 サブカテゴリーを抽出し、下位項目毎に現代の状況にあった質問の表現や応答表現を検討し 42 項目の質問を作成した。また、医療事故報告内容から与薬時の看護師の RTB を抽出し、計量テキスト分析により、5 カテゴリー【リスク認識の低さ】、【ルールの遵守不良】、【多重業務による忘却と楽観的判断】、【自己管理能力への過信による作業の省略】、【業務過多による処方箋の確認や情報伝達不足】を抽出し、53 項目を作成することができた。その結果、質問は 95 項目となった。

ステップ 2 では、フォーカスグループインタビューを実施し、質問項目の表面妥当性の検討を行った。医療安全管理者 4 名の看護師から、専門的な見解による質問内容の表面妥当性の検討を行い、最終的に 91 項目の質問を作成し、与薬における看護師の RTB の自己評価質問紙の原案とした。

第二研究では、第一研究で作成した質問紙の原案の信頼性・妥当性の検討を行った。全国の特設機能病院地域および地域医療支援病院 (病床 200 床以上の病院) で働く看護師へ、無記名自記入式調査を実施した。総依頼数は 197 施設で、44 施設より承諾を得ることができた。

研究協力の得られた病院の看護部に質問紙の配布を依頼し、その結果 628 件の回答を得て、うち有効回答 586 件 (有効回答 94.1%) を分析対象とし、その後単純集計及び項目分析と探索的因子分析を行った。日常生活の RTB 項目では、【交通ルールの不遵守】、【事前の安全確認行動】、【人の影響により行動】、【楽観的考え】の 4 因子 12 項目が抽出でき、与薬における RTB 項目では、【状況によ

る確認の不徹底】、【認識しながらの未確認行動】、【人的影響による誤った対応】、【多重業務による抜け】の4因子20項目が抽出できた。つぎに確認的因子分析を行い、探索的因子分析で得られた仮説モデルの適合をそれぞれ確認することができ、各因子間の相関性を認めることができたが、一部低い相関を認める項目があった。また、Cronbach's α 係数=.888 で信頼性を確認することができた。さらに、RTB 各因子の合計得点とインシデント・アクシデントとの比較により相関性を認め、自己評価値の基準を設けることができた ($p < .01$)。以上により、与薬における看護師の RTB の自己評価質問紙が完成した。

<<結論>>

結果は RTB の影響要因の個人の傾向性や、状況要因などを示唆する先行研究結果と同じであった。また、与薬における RTB の質問項目は、医療事故報告の大量データから RTB の4因子を分類することができ、現状の与薬時の RTB の特徴を明らかにできた。また、日常生活の RTB と与薬における看護師の RTB には、強い相関を確認することができ、看護師の日常生活の傾向が、与薬時の行動に関連を示唆する結果となった。また、一部因子に課題があるため、さらなる検討を行う。今後この質問紙の活用により、看護師個人が事前に自己の傾向に気が付き、事故防止行動への一助となることを期待する。

論文審査結果の要旨

医療は安全を優先事項として対策しているが、医療事故は今なお発生しており、その要因は様々で、かつ複雑化した重大な事故が発生している。その状況に携わる看護師には、常にリスクを認識し対応することが要求されるが、その行動には個人差があり、リスクを慣行する行為、つまり対象の危険や損傷の可能性を認識しながら行われるリスクテイキング行動 (Risk-Taking Behavior: RTB) がある。看護領域の研究では、時間的要因や社会的圧力などの関与が示唆されているが、未だ具体的な対策を考案した研究はなく、個人の傾向を判定するツールなどの報告はない。本研究の目的は、看護師個人が自己の RTB の傾向性を知ることができる自己評価質問紙の開発を行い、それにより事故防止への自己認識を高める方策とすることである。

第一研究では、看護師の与薬における RTB の自己評価尺度の質問紙の原案を2ステップで進めた。ステップ1では、医療事故報告内容・文献から看護師の RTB についての質問を95項目作成した。ステップ2では、フォーカスグループインタビューを実施し、質問項目の表面妥当性の検討を行い91項目の質問を作成し、これらを原案とした。

第二研究では、第一研究で作成した質問紙の原案の信頼性・妥当性の検討を行い、無記名自記式質問紙調査を実施した。総依頼数は197施設で、44施設より承諾を得ることができた。有効回答586件(有効回答94.1%)を対象分析とした。日常生活の RTB 項目では、【交通ルールの不遵守】、【事前の安全確認行動】、【人の影響により行動】、【楽観的考え】の4因子12項目が抽出でき、与薬における RTB 項目では、【状況による確認の不徹底】、【認識しながらの未確認行動】、【人的影響による誤った対応】、【多重業務による抜け】の4因子20項目が抽出できた。確認的因子分析を行い、探索的因子分析で得られた仮説モデルの適合をそれぞれ確認でき、Cronbach's α 係数=.888 で信頼性を確認できた。RTB 各因子の合計得点とインシデント・アクシデントとの比較により相関性を認め、自己評価値の基準を設けることができた ($p < .01$)。これらのことから、与薬における看護師の RTB の自己評価質問紙を完成できた。

以上より、本論文は本学大学院学則第13条第3項に定める博士(看護学)の学位を授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

Health, 14(1), 1-22, 2022.